

# 『聖杯由来の物語』における聖顔布の表象可能性

*La Sainte Face dans le Roman de l'Estoire dou Graal*

横山安由美

Ayumi YOKOYAMA

『聖杯由来の物語』 *Le Roman de l'Estoire dou Graal* は1200年頃ロベール・ド・ボロン Robert de Boron によって古仏語で書かれた韻文作品である<sup>1</sup>。「聖杯」の「由来」を新約聖書の時代に設定して描いたことで知られている。最後の晩餐でイエスが使用した容器で、しかもアリマタヤのヨセフが埋葬時に聖血を受けた容器がやがて「聖杯」Gaal という呼称を獲得し、最後に西洋に伝えられるというのが概略である。

ところでこの物語にはもう一つの貴重な物体が登場する。聖女ヴェロニカ（作品中ではヴェリーヌだが、本文ではヴェロニカに統一）の聖顔布である。ヴェロニカの名を直接聖書に読むことはできないが、一般に「イエスのことを嘆き悲しむ女たち」（ルカ 23, 27）の一人と見なされ、十字架の道行きにおいて手持ちの手ぬぐいでイエスの顔をぬぐったところ布に御顔が写った、そういう女性として知られている。教会に飾られる「十字架の道行き」の画像を初めとして、聖顔布をもったヴェロニカ像は宗教美術においてたいへん多く描かれた。伝承によって細部にさまざまな差はあるものの、民間説話によって人口に膾炙した。『聖杯由来の物語』の典拠となった『ニコデモの福音書』や『主の復讐』譚の数々の版にも登場する。ヴェロニカに関する記述は、したがってこれらの典拠のあらすじを追ったものであると考えられる。

なお『主の復讐』譚とは、ローマ皇帝ヴェスパシアヌス<sup>2</sup>とティトゥスが、イエスの死を引き起こしたユダヤ人たちに復讐するという内容である。『ニコデモの福音書』等の新約聖書外典系の伝承が発展し、さまざまな言語で語り継がれたものである。その際、ローマ皇帝が復讐を決心するきっかけとして用いられているモチーフがヴェロニカの聖顔布である。皇帝は不治の病を病んでいるという設定で、彼はその布を見ることで快癒し、ユダヤ人への復讐を決意するからだ。

一般に『聖杯由来の物語』研究では、もっぱら聖杯にのみ関心が寄せられ、この聖顔布について語られることは少ない。中世では「あたりまえ」の伝承だっただけに、それを取り込み、使用したことの意味を問うことを、研究者たちが忘れてしまったようだ。本稿では、この聖顔布にかかわる個所を和訳した後、作者がこの物体にこめた役割を、作品の内的読解によって、検討し、考察したい。時間的制約から、本稿では聖杯についての細かい考察や聖顔布伝承についての説明は省略することを断っておく。

#### 【翻訳】 1465 ～ 1748 行

巷に証言され、皆が思っているようなひどい過ちをピラトが犯したわけではない、ということ〔皇帝の〕使者たちは理解した。この話題の預言者はいったい何者で、どんな力をもっていたのか、彼らは聞いて回った。この世で最高の奇跡の数々を行ったことは、四方八方知れ渡っている、と人々は答えた。男も女も彼に会った者は、魔法使いのようだと思ひなした。そこで使者たちは言った、「その人物に属する何かを持っている人を、教えてはもらえませんか？その人物の物で、しかも私たちが持ち運べるような物を持っている人を。なんとかしてそういう人を見つけないかと思っているのですよ」 彼らの一人が、その人物の「顔布」を持っているという女のことを知っていた。女は毎日それを崇めているのだとい

う。だが、その女がそれをどこで見つけ、手に入れたのかは知らないようだった。そこで使者たちはピラトを呼び、その男の言ったことを語って聞かせた。ピラトはただちに、その女がどんな名前前で、家はどこの通りにあるのか男に尋ねた。「ヴェリーヌ [= ヴェロニカ] という名前です。おかしい人物ではないですよ。学校通りに住んでいます」 女の住所や名前がわかったので、ピラトは使いを送って、呼びにやった。女はすぐにやって来た。女が来るのを見ると、神の思し召し通り、ピラトは立ち上がった。貧しい女はピラトが自分にかくも敬意を払うのを不思議に思った。女を丁重に歓迎すると、ピラトは彼女を片隅に呼んで言った、「ご自宅に思い出の人の絵姿をお持ちで、それを崇めていらっしゃるのか。どうかお願いですから、それを私どもに見せていただけませんか。何かを取ったりはしませんから、信じてください」 女はその言葉を聞くと、びっくり仰天した。頑なに拒み、そんなものは何も持っておりません、と答える。そうこうするうちに〔ローマの〕使者たちが来て、そこで女とピラトが話し合っているのを目にすることとなった。使者たちは女を抱擁して大喜びし、なぜこうして集まっているか事情を説明して聞かせた。彼らは言った、皇帝の御子を治すことのできるようなものをもしご自宅に持っておられるのであれば、あなたは一生涯、日々大いなる名誉を受け、それが欠けることはけっしてないでしょう。「あなたはイエスの絵姿をお持ちで、それを思い出にされているとの噂。お金で買わせていただけるといふのなら、喜んでそれを買取らせていただきます」 (Ⅱ.1465-1534)

彼らには事情を明かし、もう布を隠さない方がいい、とヴェリーヌは判断した。まず申し出を拒み、こう言った、「たとえ何をもってしても、皆さまがお求めのその物体を、お売りしたり、お譲りしたりするつもりはありません。代わりに、そのまま私を皆さまのお住まいのローマにお連れいただくというのはどうでしょう。

私から何も取らないという条件で、私が絵姿を持って皆さまと  
いっしょに行く。そのように皆さまやお仲間がお約束してくださ  
れば助かるのですが」それを聞いた使者たちは、心中たいそう  
喜び、こう言った、「大喜びであなたをお連れしますとも。それ  
にお望みなら、何でも約束しましょう。ただその前に、その絵姿  
を私たちにひと目見せてはもらえないでしょうか。たいへん見た  
いと思っているのです」そこにいたすべてのユダヤ人たちはこの  
言葉を聞くと、女がこれでますます豊かになり、相当の榮譽を受  
けることだろうと言い合った。ヴェリーヌは使者たちに言った、  
「ちょっとお待ちください。その絵姿を取りに行ってみます。  
皆さんにお持ちするために」そこから足早に立ち去ると、自宅に  
向かった。家に入ると、長びつを開けて絵姿を取り出した。そし  
てすばやく上着の下に入れると、使者たちのところに戻った。そ  
れを見ると彼らは立ち上がり、たいへんな敬意を払った。女は彼  
らに言った、「どうかお座りください。そうすれば、イエス様がお  
顔をぬぐった布をお見せしましょう。この方に対してユダヤ人  
たちは暴虐をはたらいたのですよ」そこで皆揃って腰かけた。と  
ころがそれを目にするや否や、彼らは皆びよんと飛び上がってし  
まった。というのもそうせずにはいられなかったからだ。なぜお  
立ちになるのですか、とその善良な女が尋ねると、皆口々にこう  
答える、「だって！その絵姿を見ると、そうせずにはいられない  
のですよ。そうしなくてはならない、だからそうしたんです。奥  
様、どこでこの布を入手されたのか、どうか私たちに教えてください」  
彼女は答える、「申し上げます、何が起きたのかをお話し  
しましょう。一枚の布を作らせ、両手にそれを持っておりました。  
そのときに道すがらその預言者様に出会ったのです。後ろ手に縛  
られ、革紐につながれていました。ユダヤ人たちは私を見ると、  
預言者の顔をぬぐうためにこの布をどうか貸してくれ、と頼んで  
きました。私は急いで布を手にとると、その顔をぬぐいました。

たいへん発汗されていて、お体全体が汗ばんでおられたからです。そして私は立ち去り、彼らは急いで預言者様を引っ立て、めった打ちにしたのです。それはひどい扱いでした。けれども預言者様は黙って耐えておられました。そして家に帰って自分の布をふと目にしたとき、そのお姿がそっくりそのままに写っていることに気づいたのです。もし皆さまがこの布を必要とされていて、これが皇帝陛下のご息のお苦しみを和らげ、そのお役に立てるものだというのなら、私は喜んで皆さまと一緒に旅立ち、この布を持参いたしましょう」 使者たちは深く感謝した。彼らが帰郷したときに、それはきっと役に立つだろうと。また、この布ほどに効力のある物は他に何も見つけていなかったからだった。こうして海を渡り、故郷に帰って行った。さて彼らはローマに戻った。皇帝はたいそう喜び、彼らに情報を求めた。首尾はどうだったのか、件の巡礼の言ったことは本当だったのか、と。巡礼は何一つ嘘をついていなかった、と彼らは言った。「奴らはその預言者に対して行った悪事や辱めは、巡礼が語った以上のものがありました。しかも彼らは全く罪を悔いていないのです。ピラトについては私たちが思っていたほどの責任はありません」(1535-1640)

皇帝は尋ねた、「その預言者の物だった何か、私の息子の役に立つ何かを、持ってきてくれたかね?」「ええ、陛下! いいものを持参いたしました。ご説明しましょう」 そう言って、彼らはどうやって女を見つけ、女が彼らと一緒にやってきたか、経緯をつぶさに語った。皇帝はそれを聞くと心躍らせ、言った。「よくやった、大儀であったぞ。見事なものを持ってきてくれた。これに匹敵するものは、他に聞いたことがない」 皇帝はその女を出迎えると、ようこそと歓迎し、もし息子に喜びと健康を取り戻してくれるのなら、大金持ちにしてやろうと言った。その言葉を聞いて女は喜び勇んで言った、「陛下のお喜びになることを、全部叶えてさしあげましょう」 肌身離さず持ってきた絵姿を皇帝に

見せた。それを目にすると、皇帝は三度女に向かっておじぎをし、たいそう不思議がった。金も銀もかなわない、こんなに美しい人間の絵姿はいまだかつて見たことがない、と語った。両手で布を抱えると、息子の閉じ込められている部屋に運んだ。病氣〔ハンセン病〕のために隔離されていたのだ。そしてヴェスパシアヌス〔皇子〕が見ることができるよう、布を窓のところに置いた。するとなんと、布を見るや否や、いまだかつてなかったほど健康な身体に戻ったのだった。それが我らが主の思し召しだった。彼は言った、「主よ、いったい何が、この大変な病氣や大変な苦しみから私を救ってくれたのでしょうか？もう何の苦痛も感じません」(1641-1688)

続けてヴェスパシアヌスは、「直ちにこの壁を取り壊してくれ」と叫んだ。人々は直ちに大急ぎで実行した。壁を崩してみると、そこに現れたのは健康で朗色をたたえた皇子だった。一瞬で彼を治してしまうなどという、誰にもできないことをやってのけたこの絵姿がいったいどこで入手されたものなのか、人々は知りたがった。彼らは皇子に一連の経緯をすべて語って聞かせた。件の巡礼は牢獄から解放された。巡礼がその預言者について語ったことや、彼ら〔ユダヤ人たち〕がその立派な人物を殺したというのは本当なのかどうか、皇子は尋ねた。その通りです、と周りの者たちは答えた。巡礼にはたくさんの金子を与えたので、彼は一生涯豊かに暮らした。そしてもちろんヴェリーのことも忘れてはいなかった。たくさんの財貨が彼女に与えられた。(1689-1710)

さて皇子は一連の話を聞いたとき、気分を害し、いたく怒り、こう言った、「その悪行に同座した者はすべて、必ずやイエス様の死の報いを受けることだろう」そして皇帝に言う、「もしその機会と力があるのなら、彼らに報復するまでは、私はいかなる幸せも栄誉も得ることができないでしょう」そして続けて、実の父にこう言った、「あなたは王でも皇帝でもない。本当の意味で王

である方は、私たちすべてに対して大いなる力を及ぼし、その場でこの絵姿にこういう力や効果を与えたもうたその方のみ。その絵姿は私をすっかり即座に治したのだが、普通の人間にはこんなことはできない。あなたにも他の誰にも、たとえどんなに身分が高くとも。でもその方は皆に対して君臨し、まごうかたなく、そういう力を持っておられるのです。(1711-1732)

父上、両手を組んで切にお願いします。私の主人として、私の友としてのあなたに。どうか私の本来の主人である方の死の復讐に行かせてください。あの汚らわしいユダヤ人の悪人どもが卑劣なやり方で殺したあの方の死の」 皇帝は答えた、「息子よ、私も同感だ、お前の望みを果たすがよい。父と子だからといって遠慮することはない」 この返答を聞いてヴェスパシアヌスは心中大いに喜んだ。このように事は起こり、人々は旅し、こうして絵姿を運んだのだった。今でもそれは「ヴェロニカ」と呼ばれ、ローマで大事な聖遺物として保管されている。(1733-1748)

### 【考察】

『聖杯由来の物語』における聖顔布と聖杯の比較から始めよう。両者には多くの共通点がある。両方とも元来は、それぞれ「手ぬぐい」と「食事の容器」という日常的な道具であった。また所有者も、使徒の集団とは縁のない、一般人であった。ところが彼らは偶然地上でイエスに出会い、彼に恩恵を施すこととなる。ヴェロニカはイエスの顔の汗をぬぐい、アリマタヤのヨセフはイエスの身体をピラトから貰い受けて埋葬する。それに対する神からの恩返しとして与えられるのが、「顔」の刻印であり、聖血を含んだ聖杯である。こうして彼らが得た物体は、たんなる個人的なイエスの思い出であるにとどまらず、「見られる物体」として恭しく運ばれ、見る者に対して特殊な効果を発揮する。聖顔布については、ヴェスパシアヌスを病から治したばかりでなく、見る者を

「立ち上がらせ」たり、「おじぎをさせたり」する。聖杯については闇の中に光を輝かせ、見た者に究極の「歓び」を感じさせる。

中世ヨーロッパでは、領主と騎士の關係にせよ、神と信徒の關係にせよ、二者間の關係は双務的に描かれることが多い。AがBに何かを与えた（した）ので、BもAに与える。たとえA、B間に支配關係や力の差があっても、双務性は変わらない。「神」と「人」ということでは、弱い側（人）が危険を賭してまで何かをしたのであれば、神の側はもっと大きな恩恵を彼に施さねばならない、そういう論理の返礼が多い。神に対して恩恵をなした者には大いなる恩返しを、悪行をはたらいた者に対しては罰を、この基本構造の中で、ヨセフやヴェリーヌは報われ、イエスを死に追いやったユダヤ人たちはヴェスパシアヌスの手で処罰される。ここまでならば、典型的なキリスト教説話の構造に分類されると言える。

だが『聖杯由来の物語』はたんなる「神の恩返し」や「復讐」の話なのだろうか。一見、冒頭の祈祷文的な文体や聖書に類した記述から教化文学とみなされることも少なくなかったが、それに還元できない多様な要素を含んでおり、神学的・社会的なイデオロギーを含んでいることは拙著に述べた通りである<sup>3</sup>。一例を挙げれば、本作品はアリマタヤのヨセフを「ピラトに仕える騎士」と設定することによって、聖杯を「騎士階級への贈り物」として描く<sup>4</sup>。ペテロがローマに礎を築くであろう〈使徒たちの共同体〉、つまり制度としての〈教会〉と、ヨセフが形成する世俗の共同体、つまり後の〈アーサー王世界〉とが随所で対比される。この物語では復活後のイエスが誰よりも先にヨセフの前に現れ、使徒たちのふがいなさに言及し、わざわざ「他に誰も連れてこなかった」(1833)、「お前をしかと愛す」(1842)などと言明する。ここからも、この物語の骨子は「教会」や「キリスト教」の礼賛ではなく、神に護られた世俗の共同体の可能性についての実験的な問いかけで



あることが見えてくる。

聖杯や聖顔布が果たす役割をもう一步踏み込んで考えてみよう。一見すると、十字軍遠征とエルサレム等における大量の聖遺物獲得を通して流行した、当時の「聖遺物崇拜」の表れであるように思われる。神の遺物に対するあくなき執着。とくに当時の教会は、巡礼などの訪問者を獲得し、経済的な基盤を確立するために、聖遺物を強く欲した事情がある。ところで聖遺物というのは、一般的には爪や毛髪など、聖人(ないしイエス本人)の身体の「一部」が残存し、それを崇拜するものである(換喩的に衣類や道具が対象となる場合もあるが、広い意味でこれに含まれる)。したがって現実的な文脈で問題になるのはその聖遺物の「真正さ」、つまり本物か偽物か、ということであって、奇跡にせよ、ご利益にせよ、真正なる遺物が発する「効果」は遇有的かつ後天的な結果でしかない。

しかしながら聖杯や聖顔布は、前述の通り、元来は一般の「道具」であり、人間の身体ではない。厳密には聖遺物ではなく、理論上反転している。ここに注意しなくてはならない。化体した神との接触を通してそのキャンバスが獲得するのは、なんらかの、神の身体の、真正な像である。イエスの歴史的な身体そのものではないが、その真正なる像。神自身の意思によって写され、与えられた像なので、その真正性については疑いの余地がない。その像が発する「効果」は、生きたイエスの身体が発するそれと同等であり、常に現在化されている。「ヴェロニカ」Veronicaという名前は、「真の図像」Vera Iconから派生したとも言われるが、そう考えるとわかりやすいだろう。また、ロベールが実際に見たかどうかはわからないが、今もローマのサン・ピエトロ寺院にその聖顔布が「ある」、と現在形で記述されているのだから(11748)、著者にとってそれは大きなリアリティーをもって存在する何かだったはずである。

『聖杯由来の物語』における聖杯や聖顔布の主題の利用は、文学上の「神の似姿」*imago dei* 創出の試みであった。これらの「像」は生身の身体と、どう違うのだろうか。イエスの歴史的身体がもう存在しない以上、私たちはその「像」*imago* を求めるほかにない。ミシェル・ド・セルトーは『神秘の寓話』*La Fable Mystique* の中でこのように述べている。

キリスト教の伝統においては、原初的な身体の喪失こそが、まさにその不在の諸結果かつ代替物として、教会体、教義体、などの諸制度や諸言説を生み出し続けてきた。いかにして言葉を「体にする」のか<sup>5</sup>。

本来は「人間」自体が、神に似せて創られた「神の似姿」なのだった。だが「人間」は「人間」を描くことに飽き足らず、神の「像」や「身体」を「創り」続けた。「創り」、目の前にそれを置きたいという根源的な欲望を持ち続けた。ただしそれを完全なかたちで実行するには、それが神の姿であるがゆえに、またそれが人間には不可視かつ不可知であるがために、神自身の意思によって作られる何かである他はなかった。どこかで神の介在を必要とするのである。そして、そういう風に絶対者の「像」を「創る」ことのできる希少な機会が、まさに化体したイエスを対象とする新約の時代の諸々の物語の中にあっただった。

聖顔布は、イメージ生成のありかたを示す、きわめて示唆に富んだ存在である。

対象を距離を置いて写すのではなく、対象と媒体（布）との間の距離の介在なしにイメージが成立することを、この伝説は示唆しています。それは、オリジナルとコピーとの関係について考えさせずにはいません。しかもできあがっ

たイメージは、通常の肖像画などとは異なり、左右が逆になった鏡像です。キリストの左右相称の顔は、そもそも鏡像のように布に直接写し取られたわけです<sup>6</sup>。

通常の芸術は、絵画であれ彫刻であれ、芸術家という「主体」が「対象」と数メートルの「距離」を置き、対象の「像」を作り上げる。創造者と被造物の間に「主体／客体」*sujet / objet*の関係がある限りにおいて、像と対象は同一ではありえない。「主体／客体」の「距離」こそが「像」の真正性を妨げるといふのなら、距離のない、直接の「接触」こそが創造の理想形態だということになる。

この視点を文学に移し変えて考えることも有効ではないだろうか。作家という「主体」が、社会なり人間なり、「何か」を描こうとしても、その対象を対象として見つめる限りにおいて、それは真正な像たりえない。たとえば、女性や弱者についてこれまで描かれた作品が、どれ一つとして本当の意味で女性や弱者を表していないという、根源的なパラドックスがこれだ。真の表象のために論理的に導き出される結論、つまり主体と対象の「同一化」または「距離の克服（極小化）」が、現実にはどのように可能なのだろうか。これを問い続けることこそが表現者の責務なのだ。対象との人格的・身体的な接触や交感が必要になるとするならば、つきつめれば、やはり芸術とはある意味で「愛」なのだという結論に至るのかもしれない。

ヴェロニカの聖顔布に話を戻そう。神との直接の接触によって、また神の意思によって、真正な神の姿を写したそれは、「像」にとってのユートピアのようにも見える。だがじつは完璧ではない。なぜならば左右反転しているからだ。また、顔以外の部分がないからだ。そして何よりも、それは二次元の平面に収められているからだ。くるくるっと巻いて「持ち運び可能」*portable*であるという簡便さは、「表象」として有用であると同時に、また限界を

示していた。

それならば聖杯はどうだろう。三次元の立体であるという意味において、また、中に本物のイエスの血を受けたという意味において、イエスの身体の真正な「立体像」たりえている<sup>7</sup>。聖顔布の限界を理論的に克服している。「立ち上がる」「おじぎ」という聖顔布の効果を凌駕した、強い「歓び」を見る人にもたらすのも、そのためだと解釈される。その「歓び」は、多くの聖杯物語においては「恩寵」と同一視される。

この物語は「身体」というキーワードの周りに構築されている。そもそもヨセフやヴェロニカがイエスに施した恩恵は、汗を拭くにせよ、墓に入れて埋葬するにせよ、いずれも、イエスの「身体」への思いやりであったことに注意したい。もうすぐ地上から消えゆく、せつない「身体」であったがゆえに、その像をありのままに写し残すことを神は返礼として選んだ。桜のようなはかなきものが放つ無限の光芒とその陶醉のなかにこそ、「創造」はなされたし、なされなくてはならなかった。典拠に沿ってヴェロニカの聖顔布の経緯を書くうちに、表象ということの「可能性」と「限界」に著者は気づいたのかもしれない。そこで聖顔布を止揚し、「完全なる」身体を表象する何かとして、「聖杯」と聖杯の物語を自由に組み立てていったのではないだろうか。聖顔布がもつ表象としての特異性が、聖杯という主題の理論的生成に影響を及ぼしたのだという仮説を本稿の結論としたい。もちろんその実証や詳細の説明は、今後の課題である。

---

【注】

- 1 Robert de Boron, *Le Roman de l'Estoire dou Graal*, Nitze(éd.), Champion, 1983 翻訳箇所もこのテキストによる。
- 2 Vespasianus ローマ皇帝(在 69-79)。ユダヤ人戦争(66-70)の鎮圧で

---

頭角を現し、その後皇帝となる。Titus（在 79-81）はその息子であり、次代の皇帝であるが、中世の伝承においては両者の関係や身分について必ずしも正確とは言いがたい設定が行われた。

- 3 拙著『中世アーサー王物語群におけるアリマタヤのヨセフ像の形成—フランスの聖杯物語—』溪水社、2002
- 4 ピラトに対する奉仕の代償としてヨセフはピラトからイエスの遺体を貰い受ける。また、イエスが最後の晩餐に使用した容器を入手したピラトは、それを埋葬の際にヨセフに与え、ヨセフはイエスのわき腹から出る血をそれで受ける。この作品ではそのように設定されている。
- 5 拙訳「ミシェル・ド・セルトー「<神秘体>あるいは欠けた身体」試訳」『国際交流研究 8』（フェリス女学院大学国際交流学部）、2006年、p.140
- 6 谷川渥「ヴェロニカの布」<http://www.nichibun-g.co.jp/library/forme/255/f2551819.htm>（2008/1/15 参照）より引用。
- 7 身体全体の像というと、埋葬の際にイエスの全身の像が写ったとされるトリノの「聖骸布」が思い浮かぶ。こうした物体の存在が、ロベールにおけるイエスの身体全体の「像」の創出という発想を生んだのかもしれない。なおこの「聖骸布」と現実の「聖顔布（マンディリオン）」の関係についても諸説あり、長い歴史の中で複雑な経緯を辿っている。Cf. イアン・ウィルソン『トリノの聖骸布』文芸春秋、1985